

神の武具を身につけて(1)

エペソ 6:10-15

今日のメッセージの題は「神の武具を身につけて」です。武具とは戦うための道具です。エペソ書を書いたパウロはあなたたちは「主にあって、その大能の力によって強められ」（エペソ 6:10）つまり神様から力をいただいて戦いなさいと言っています。これを読んで「えっ。いろんな人生の厳しい戦いから離れて教会に来たのに、まだこれからも戦えと言うのですか？」と思う人がいるかも知れません。しかしよく考えてみると人生様々な面で戦いはあるものです。病院の待合室では高齢者同士のよもやま話で花が咲くことがあるそうですがそこでは一番重い病気を抱えている方が勝利者となるみたいです！？特にクリスチャンの戦いは普通の戦いとは違います。み言葉にありますようにクリスチャンの戦いには悪魔が働いているのです。なぜ悪魔が働くかと言うなら、クリスチャンは神に愛されていることが分かっている存在だからです。神を愛し、神に愛されて歩む存在だからです。悪魔はさまざまな策略を使って、クリスチャンを神から引き離そうとしています。この悪魔の策略に立ち向かうためには、私たちが神の武具を身につける必要があります。エペソ 6 章には全部で六つの武具が挙げられています。「神のすべての武具」とあるように、キリストの兵士には六つの武具のすべてが必要です。いちどに六つすべてについてお話する時間がないので分けて話をしたいと思います。今日は最初の三つについて学んでゆきます。その三つとは「真理の帯」「正義の胸当て」「福音の備え（靴）」です。この三つは武具（戦う道具）というよりは、身支度です。しかし、身支度も、武具の一部です。消防士は火災の現場に向かうときかならずヘルメットをかぶり、特別な防火服を着、そして靴を履きます。聖書もまた、悪魔と戦うのにまず身支度から始めるように教えています。

1) 真理の帯

その身支度の第一は「真理の帯」です。ここではローマの兵士の姿を思い浮かべると考えやすいと思います。ローマの兵士は、決して長い丈、長い袖の服を着ません。そんな服装では自由に動くことができませんし、服が何かに引っかかって身動きがとれなくなってしまうからです。短い丈、短い袖の服を着ます。しかもその上にベルトをしっかりと巻きつけて、それが乱れないようにします。

帯、(ベルト)は腰に巻きます。「腰」は漢字で「身体の要」と書くように、身体の動きの中心的な部分です。ですから「腰には真理の帯を締め」というのは、真理、しかも神の真理を行動の原理、原則とするということです。

主イエスが、ヨハネ 8:44 で「悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。悪魔は、偽りを言うとき、自分の本性から話します。なぜなら彼は偽り者、また偽りの父だからです。」と言われたように、悪魔は偽りの父です。悪魔は嘘や偽りを言う時には軽い気持ちや、ちょっとした出来心で言ったりはしません。本心で、確かな目的をもって語ります。真剣に嘘を言います。悪魔は、神が禁じられた木の実を取っても、つまり、神のことばに逆らっても「あなたがたは決して死にません。」と、エバに偽りを吹き込み、アダムとエバをその偽りによって罪に引き込みました。それ以来、悪魔は人間に偽りを真剣に語り続けています。悪魔は、偽りの神々を作り出し、偽りの宗教を作り出してきました。あからさまに神のことばを否定するだけではなく、聖書のことばを使ってでもクリスチャンをだまそうとします。聖書のことばを使って主イエスを誘惑したのと同じことを、悪魔はクリスチャンに対してするのです。悪魔は巧妙です。真理に限りなく近いけれども真理ではないもの、似てはいるが違うものによってクリスチャンをだまそうとするのです。特に終末、世の終わりにはそのような働きが拡がると聖書で言われています。「また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。」(マタイ 24:11)

この悪魔の偽りに対抗できるのは神の真理だけです。あなたは「信仰の奥義」を理解しているでしょうか。もし、まだ理解できていないと感じているなら、謙虚な心で、また、熱心な思いで神のことばの真理を学ぼうとしているでしょうか。毎日の生活の中でどれほどの時間をそのために割いているでしょうか。

真理の帯とは信仰の確信です。真理を持たなければ、神の真理が行動の原則になっていないと悪魔との戦いに勝つことはできません。日常生活の問題に信仰を働かせて取り組みたいと思うのです。

2) 正義の胸当て

身支度の第二は「正義の胸当て」(チョッキ)です。胸は心の宿るところとみなされてきました。今でも「ハート」という言葉は、心臓にも、心にも両方に使います。警察官が身につける防弾チョッキが心臓を守るように、「正義の胸当て」は私たちの心を守ります。箴言4章23節に「何を見張るよりも、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれから湧く」とあります。ただ心を見張ると言ってもどのようなことが心を守るのでしょうか？ よく誰にでも良心があるからそれによってと言います。しかし聖書には「きよい良心」「健全な良心」もあれば「汚れた良心」「弱い良心」「邪悪な良心」ということばも出てきます。つまり事柄に対してだれでも良心によって共通の理解と応答をするとは限らないのです。「誰だってこれは悪いことだと思うでしょう」と言っても現実はそうでないことがあります。つまり良心は正義の胸当て、私の心を守るものにはならないのです。それこそ食事の時、箸をつける順番を間違っただけで罪悪感を感じる人もいれば、人に暴力を振るっても何とも思わない人、罪悪感を感じない人がいます。すべてはその人の感じ方次第ということです。そのような考え方を現代では「ポストモダン」と言ったりします。ポストモダンの思想によると、絶対的な基準はどこにもありません。自分にとって正しいと思えることが正しく、自分が好きでないものは悪なのです。すべての真理は主観的なのです。本人が真理だと思えばそれが真理となるのです。ただこれには盲点があります。そもそも私たちは最初から自分でものごとを判断できるだけのものを持ってはいません。最初から不完全で歪んだ価値観を正しいとして今まで生きてきているのです。最初の基準自体が歪んで危うい中で生きてきているのです。レンズを想像すると分かりやすいと思います。レンズが最初から歪んだり、傷ついたりすると映し出されるものも歪んで見えます。ですから結局は自分で選んでいるように見えてその時代の流行に流されるだけで終わってしまうことが多いのです。まずそこから考える必要があります。

聖書が「正義の胸当て」を身につけるようにと教えているのは、目を開いてまず自分自身が神の真理に立っているのかどうかと見極め、ずれていたなら神との関係を修復し(それを悔い改めと言います)そして世の中の悪を見てそれと闘うということになります。この「正義の胸当て」は、じつは、神ご自身がすでに身につけておられるものです。イザヤ59:17に「主は義をよろいのように着て、救いのかぶとを頭にかぶり、復讐の衣を身にまとい、ねたみを外套として身をおおわれた。」とあります。神がキリストの兵士に求めておられるのは、神と同じ正義の心を持って、偽りや不義、差別に立ち向かうことです。罪と悪を嘆き、悔い改め、また、人々がそこから立ち返るようにと、とりなし祈ることです。神の国と神の義とを求めてやまない熱い心を神は悪魔と戦う者に求めておられます。悪魔は人間よりも賢く何でも知っていて、私たちをその策略でだまそうとします。しかし、悪魔がひとつだけ知らないことがあります。言わば弱点です。それは「愛する」ということです。私たちが神を愛し、神の義を愛するとき、たとえ神の義を完全に守り行うまでに至っていなくても、神への愛によって私たちは悪魔に勝つことができるのです。今年の指針は「神を愛する者となる」ですがこのように生きることが強力な悪魔への対抗策となるのです。神への愛によって作られた正義の胸当てを着け、悪魔に立ち向かいましょう。

3) 福音の靴

第三の身支度は、「福音の靴」です。「足には平和の福音の備えをはきなさい。」(エペソ6:15)とありますが、この「備え」というのは、兵士たちが履く靴のことです。それが「平和の福音の備え」と言われているのは、イザヤ52:7で「良い知らせを伝える者の足は山々の上にあつて、なんと美しいことか。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、『あなたの神は王であられる。』とシオンに言う人の足は。」と書かれていることから来ています。今日のようにインターネットで世界中がつながっ

ている時代とは違って、古代の人はメッセージを伝える伝令によってニュースを知りました。特に戦争の時には、勝ったのか、負けたのか、人々は固唾を呑んで戦場からの伝令を待ちました。「勝利」を伝える伝令、「平和」を告げる伝令が来るのを人々は待ち望んでいたのです。

戦場から「勝った」「負けた」「和解した」という知らせを伝えるのも、やはり兵士の務めです。兵士のひとりが伝令となって人々にニュースを知らせます。クリスチャンはキリストの勝利の伝令を告げる兵士です。キリストは罪と死と悪魔に勝利されました。私たちはかつては神の敵でしたが、キリストの十字架によって神と和解し、平和を与えられたのです。これが良い知らせ、福音です。私たちはこの福音を聞いて信じ、信じてほんとうの平和を味わいました。そして、今度は、私たちがこの平和のよい知らせを、他の人に伝えるのです。クリスチャンはよい知らせを伝える伝令の兵士です。

聖書に「良い知らせを伝える者の足は山々の上にあって、なんと美しいことか。」とあるように、友人、知人、親族を訪ねて福音を語り伝える人の足はなんと美しいことでしょうか。最近では、コロナ禍のため教会の集会に誘ったり、家庭集会を持ちにくくなってきました。伝える方法が限られているように感じます。しかしよく考えると昔よりもずっと早く遠くの人に伝えることが出来るようになった部分もあると思うのです。一昨年12月のことですが学生時代住んでいた寮のOBによるクリスマス会がありZOOMで持たれました。30人ほど集まりましたが日本全国はもちろんのこと、外国にいる卒業生も参加しました。みんなで賛美しましたがそのときギターで伴奏してくれたのはアメリカシカゴに住む人でした。メッセージは京都の舞鶴にいた人でした。集会の司会は東京にいた人でした。そして大阪にいる私が参加しています。ひと昔前では実現不可能なコミュニケーションが取れているのです。ですから何が一番大きな課題かと言いますと福音を、良い知らせを伝えようとする人が伝える気持ちがあるのかどうかということだと思ふのです。そして、自らが福音を伝える足として用いられるように神様に祈り求めるならば主が道なり方法なりを示してくださることと思ふます。

最後に靴はもちろん足をけがなどから守るものですが積極的に地面を強く踏みしめるものでもあります。私たちが、この福音の靴によって人々を訪ね、それは訪問することだけではありません。手紙を書いたり、話を聞いてあげたりすることも福音の靴によって歩いているのと同じです。それらをするのは悪魔を足の下に踏みつけることになることを覚えないと思ふます。なぜなら、福音宣教、伝道は悪魔がいちばん嫌うことだからです。悪魔は、イエス・キリストの十字架のことばを嫌います。キリストの復活による勝利の福音を嫌います。それで、伝道以外のさまざまな活動で私たちに忙しくさせ、キリストの福音を伝えさせないようにするのです。また福音の靴さえ履いていれば自分は守られているのだからわざわざ出て行かなくても良いと思ったりする人もいます。あなたに福音を伝えるために誰かが福音の靴を履いて歩き、走って下さったことを覚えましょう。そのことを忘れることなく、私たちも福音の靴を履いて、福音を届けるために歩み出したいと思ふます。そして同時にそれは宣教の視点から言うならば悪魔を足の下に踏みつけていることにもなることも覚えないと思ふます。伝道することは悪魔と戦っていることになるのです。